

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 李 海
論文題目 梁啓超研究—その日本滞在期を中心に—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 楊 暁文
委 員 名古屋大学教授 田所光男
委 員 名古屋大学准教授 星野幸代

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

本論文の概要

本研究は、中国の清末民初の政治家・文学者・ジャーナリスト・啓蒙思想家という多様な顔をもつ梁啓超（1873～1929）の日本滞在期における文筆活動を中心として、彼の日本を媒介とした西洋文明受容及び日本（日本人）とのかかわりを明らかにしようとするものである。その日本滞在期が彼の啓蒙思想家として活躍した極めて重要な時期であるゆえ、本研究はそこに着眼し、着実に成果を収めてきた。日本比較文化学会・学会誌『比較文化研究』No. 99に掲載された「梁啓超と天野為之一日清版權問題の交渉をめぐって一」はその代表的なものである。

本研究は二部構成、第一部「渡日時の梁啓超が直面した問題とその解決法」（第一章「梁啓超と『和文漢読法』」、第二章「梁啓超の版權観と明治日本」）と第二部「日本滞在期における梁啓超の文学活動と日本との関連」（第三章「梁啓超の詩界革命と明治日本」、第四章「梁啓超の音楽教育思想、作品創作と明治唱歌」）からなっている。

第一部では、渡日時の梁啓超が直面した問題とその解決法について考察を加えた。日本に亡命した梁啓超にとって、何よりもまず日本語の習得が必要であった。そこから彼独自の日本語学習法・『和文漢読法』が生まれ、来日の留学生などに好評を得て版を重ねた。本研究は先行研究で検討されてきた『和文漢読法』についての考察を行ったうえ、無窮会図書館所蔵のそれに言及しつつ、李海氏が発見した船津蔵書の印が押してある『和文漢読法』に焦点を絞った。現時点では、この38ページからなる小冊子はこれまでに発見された『和文漢読法』のなかで最も古い版である。本研究は文法的間違いの訂正、船津による内容補充、船津自身の感想という三つの角度から分析した後、船津輸助と梁啓超とが同じ学校に勤めていたという知られざる事実に基づいて「この船津本のより重要な意義は、所有者船津輸助は梁啓超が創立した学校の日本人教師であること、そして実践的な観点からの評釈にある。随所で梁啓超における日本語の文法的間違いを指摘したものの、船津は漢字語習得の難しさに共感し、『和文漢読法』が清国人の日本語学習に効果があると証言している」と力説した。

日清戦争における清国の敗北は当時の中国知識人に大きな衝撃を与え、彼らの中から日本に学ぼうという考えが生まれ、日本語に訳された西洋の書物を漢訳することによって中国の近代化を図ろうとする動きが見られた。本研究は、一部の日本人が日本書を漢訳し中国側に訳書を提供した“協力者”となった事例を提示したうえで、明治期における漢訳

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

日本書をめぐっての日中間の議論を手がかりに日本書の翻訳事情を踏まえ、梁啓超の版權観などについて論を展開した。

史料によれば、来日後の梁啓超は天野為之と筆談し、二人は意思を伝え合ったそうだ。清国人の啓蒙を翻訳事業の確立から始めるべきだという議論において、梁啓超と天野為之は意気投合した。天野が『東洋経済新報』119号（1899年3月25日）に発表した「支那に版權制度を布くの策」は清国に版權制度を確立せよと要求する嚆矢となったが、二ヵ月後彼は匿名で同誌124号（1899年5月15日）に「再び支那に版權制度を布くの策を論ず」を掲載し、1901年にも、やはり「支那に版權制度を布くの策」と題する論文を公表した。しかし、両論文には大きな変化があった。最初天野は清国の教育事情を十分に考慮せず、日本で成功した教育政策を直輸入させれば万事首尾よく治まると考えていたようだが、二年後の天野の版權制度論は経済的利権へと偏るようになる。詳言すれば、二年後の論は日清貿易を促進しうる版權制度論となっている。天野は拱手傍観する日本の外務当局に版權問題に関して積極的な干渉を要請し、日本側が洋書翻訳に協力すべきという従来の立場から一転して日本書を直接清国に輸出すべしと論じるようになったのである。こうした動きを梁啓超は見守り続けた。その後天野が「日清版權同盟が日本の実業に及ぼす永遠洪汎の利益を論ず」を発表するや、梁啓超は『新民叢報』第2号（1902年2月22日）の冒頭で「日本人天野為之は『東洋経済新報』において、しばしば論説を著し、謂く必ず中国と版權を定めること」と、天野を名指しで批判した。日本側の思惑通りでは祖国の人々が翻訳事業を行えなくなることを憂慮した梁は、天野を含めた日本側の「保全支那」や「開発支那」の虚偽を衝き、「日本人の漢訳西書」と結論づけた。かくて、両者の間に生じた認識のずれが双方の立場、社会状況、時代背景などの影響を受けて関係の破綻へと発展した。この破綻が梁・天野の個人間の関係の悪化を意味するだけでなく、日清共同翻訳事業の破綻をも象徴している、と本研究は史実に基づいて鋭く指摘した。従来の梁啓超研究ではあまり見受けられなかった、重要な指摘である。

第二部では、日本滞在期における梁啓超の文学活動と日本との関連に重きを置いて考察する。

本研究は梁啓超の詩界革命と明治日本との関係を論じるにあたって、まず梁の漢訳したバイロンの詩作が木村鷹太郎の日本語訳によるものであったことを実証した。その実証を踏まえて論を展開し、「木村鷹太郎は日本主義を掲げ、対外進出を鼓吹するため、バイロンを用いたが、列

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

強による瓜分の危機にさらされていた中国では、国民の団結、列強の侵略に対抗することが第一義となり、梁啓超は、弱小国を助ける英雄、正義に富んだ国際主義者としてバイロンを描き出したのである」という結論を導き出した。後述するように、李海氏の描き出した梁啓超における木村鷹太郎像、バイロン像に議論の余地はなくもないが、日本（の翻訳など）を通じて西洋文明（ここでは具体的にバイロンの精神をさす）を受容することが梁啓超に詩界革命をもたらしたのではないか、という本研究の打ち出した明確な方向性は間違っていない。

来日後の梁啓超が健筆を揮って自国の民を啓蒙しようと政治や文学などさまざまな分野において先駆的な業績を残し、近代中国の音楽教育への発展に寄与したことをも、本研究は浮き彫りにした。上野で目にした日本軍隊生活の一齣が梁啓超に強い印象を与えた。その後彼は多くの新聞、雑誌に掲載された軍歌に注目し、その流行が国民の愛国心を培うのに役立つことに気付き、軍歌の宣伝に力を入れ、最終的には自ら軍歌（作詞）を創るにいたった。また、彼の作詞した歌「黄帝」と明治日本の唱歌「皇御国」とを比較した結果、両者の旋律が完全に一致していることが判明した。よって、梁啓超の音楽教育思想における日本的要素が果たした役割をも認識すべきだ、と本研究は主張する。

本論文の評価

本論の意義は大きく分けて二つある。一つには、新資料の発見が新事実の発掘につながった。これまでに、梁啓超独自の日本語学習法・『和文漢読法』の刊行について、五つの版本が存在するとされている。すなわち初版、再版、三版、四版、別本のことであるが、初版と再版は未発見で、四版も刊行年未詳である。そこで李海氏の発見した 38 ページからなる船津蔵書『和文漢読法』が現時点でその最も古い版となり、船津による評釈をも含めて資料的価値が極めて高い。これと同様、梁啓超の漢訳したバイロンの詩作が木村鷹太郎の日本語訳によったという新事実への発掘も学問的意義を有する。二つには、従来の梁啓超研究の空白を埋めるような考察がなされた。本論は日清の間に翻訳や著作権に関する議論を視野に、梁啓超と天野為之との交友関係、著作権意識の異同、論争の経緯と結末などを綿密に調べ、両者の関係悪化が内包する深い意味を分析した。また、梁啓超の音楽教育思想、とくに梁の作詞活動に日本の軍歌や唱歌の果たした役割を見いだしたことは先行研究のほとんどに見受けられなかった。

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

一方で、本論の問題点として、日中両国における先行研究の紹介にとどまるきらいがあり、その掘り下げがやや足りなかった部分もあった。また、明治の日本人、例えば木村鷹太郎を論じる際、明治日本全体への考察、その社会的、思想的なつながりを視野に入れて検討を進めれば本論にはより深み、広がりがあったであろうといった意見、梁啓超の音楽教育思想を語る時、日中における「音楽」という言葉の内包するニュアンスの違い、イメージのずれ、などを考慮すれば研究はいっそう深化するであろうという意見が審査委員より挙げられた。

しかし、ややもすると政治家としての側面だけを強調しがちな先行研究における梁啓超像の再構築に本論は挑戦した。梁の日本語教育法、版權観、訳詩、翻訳活動など多方面に論考の範囲を広げ、より立体的な梁啓超像を築き上げようと試みたのである。本論は梁啓超の学問に見られた日本的要素を見いだす一方、それが果たした役割を過大評価してはならない、言い換えれば、梁自身の主観性と中国文化の素養がより大きな役割を果たしたことを見逃してはならないと指摘する。つまり、梁啓超、日本、西洋の関係でいえば、日本側が素材を提供し、それを通じて梁自身は受容した西洋の思想や文化を中国の現状を十分に考慮したうえ、彼の考える中国の近代化にマッチするような思想や文化に再構成した、と本論は実証を踏まえて主張するに至ったのである。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士学位を授与されるに値するものであると判断した。